

令和二年度 入学試験（令和元年10月19日）

「国語総合」

戸田中央看護専門学校

一、次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

小学校に上がるころ、ほとんどの人が聞いたり歌ったりした^(あ)キオクがあると思いますが、「一年生になったら」という歌があります。「一年生になったら、友だち百人できるかな」という歌詞なのですが、あれってけっこう強烈なメッセージですね。小学校の一年生になったら、友だちを百人作りたい、あるいは百人友だちを作ることが望ましいのだという、暗にプレッシャーを感じた人も多いのではないのでしょうか。

学校というのは、とにかく「みんな仲良く」で、「いつも心が触れ合って、みんなで一つだ」という、まさにここで私は「幻想」という言葉を使ってみたのですが、「一年生になったら」という歌に

(じ) ショウチョウされるような「友だち幻想」というものが強調される場所のような気がします。けれど私たちは^(ア) そろそろ、そうした発想から解放されなければならないと思っています。

私が言いたいことは、「子どもたちが誰でも友だちになれて、誰でも仲良くなれる」ということを前提としたクラス運営・学校経営は、やはり考え直したほうがいいのではないのでしょうかという事です。

私は教育大学に勤めていますので、仕事柄、小中学校の校長先生や先生方とお話しをする機会も多いのですが、非常に人格がすぐれていたり、リーダーシップもある先生、教育現場で力を^(イ) ハツキしていると定評のある先生^(一) ー、というよりもだからこそかもしれないませんが、やはり「子どもたちというのはみんな良い子たちだから、教師がサポートさえすれば、みんな一緒に仲良くできるはず」という前提で頑張っているようなのです。

どの学校でも、やはり「いじめゼロ」を目指しています。そのためのプランを伺うと、「それにはみんなですべてになって」とか、「人格教育に力を入れて、心豊かな子どもたちを育てたい」「みんなで心を通い合わせるような、そんな豊かなクラスを作っていきたいと思っています」と熱く語られます。でも、私はちよつとひねくれた人間ですから、「それは理想だろうし、努力目標として高く^(エ) 掲げるのはまあいいのかもしれないけれども、そういう^(ニ) ー だけでは、逆に子供たちを追い詰めることにならないかな」と、どうしても思ってしまうのです。

「○○ちゃん、そんな一人でいいないで、みんなの輪に入りなさい」という言葉にかえて圧力のようなものを感じる子どもや、みんなと一緒になれないということに氣にするあまり「僕はダメなんじゃないか」と思う子どもも少なくありません。また理屈を超えて「こいつとはどうしても合わない」というクラスメートだっているはず。大人になってからは、みんな誰もがそういう体験をしているはずなのに、「子どもの世界はおとなの世界とは違う。子どものころはどんな子どもでも仲良く一緒にいれるはず」というのは、子どもの世界にあまりにも^(ウ) トウメイで^(イ) 無垢なイメージを持ちすぎなのではないでしょうか。

学校文化を振り返って考えると、これまではやはり「同質的共同性」という側面にしか目が向けられてこなすぎたのではないかと思います。

「クラスはみんな仲良く」という考え方には、昔はたしかに現実的な根拠があったのです。なぜなら、小学校はたいていムラに一つだったからです。

「自然村」といわれる農業社会学の概念があります。行政村と対比される概念で、だいたい室町時代

から江戸時代までの間に人びとが自然に集まってできた集落のことですが、明治時代になってこの自然村を基盤に小学校が建ってくるわけです。そうすると、そこは代々家族ぐるみで顔見知りの子どもたちが集まることになります。お互い親同士も顔見知りで、場合によっては何代も前から、「あの家はこうで、こっちは家はああで」と知っていて、「あの家から今度は次男坊が入ってきた」というような、学校を支える地域ぐるみでの濃密な関係がはじめからできていたのです。

そういう中で学校やクラスの運営がされていたわけで、近隣ネットワークのあり方が今とは全然違うわけです。昔の濃密な近隣の支えがあつてはじめて、「クラスみんなが仲良くなれるかな」という状態だったのです。

むろん、昔のそういう時代だって、じっさいはクラス全員が仲良くなるというのは難しかったと思います。でも、今に比べれば、ムラの共同的生活を核にした地域の支えがとて強かった。村中が総出で田植えや稲刈りを共同で行ったり、道路が傷めば^(ウ)道普請をし、共有林の下刈りなどの共同作業もありました。そうした地域の支えという現実的根拠があるからこそ、学校における共同性は実現していたのです。

しかしとりわけ一九八〇年代以降は、都市部ばかりではなく地方においてもそういう支えがほとんどなくなつてきていて、地域自体が単なる偶然にその場に住んでいる人たちの集合体になっています。同じ地域から学校に通つて来ていると言つても、先生方は今でもついつい「クラスは運命共同体だ」というような発想になりがちなのだけれども、子どもたちは単なる偶然的な関係の集まりだとしか感じていない場合が多いのです。

こうした状況の中で、クラスで本当に「こいつは信頼できるな」とか「この子といると楽しいな」という、気の合う仲間とか親友というものと出会えるということがあれば、それはじつは、すごくラッキーなことなのです。そういう友だちを作つたり出会えたりすることは当然なのではなくて、「とてもラッキーなこと」だと思つていたほうが良い事は多いような気がします。

そういう偶然の関係の集合体の中では、当然のことですが、気の合わない人間、あまり自分が好ましいと思わない人間とも出会います。そんな時に、そういう人たちとも「並存」「共在」できることが大切なのです。

そのためには、「気に入らない相手とも、お互い傷つけあわない形で、ともに時間と空間をとりあえず共有できる作法」を身につける以外にないのです。大人は^(三)に「傷つけあわず共在することがまず大事なんだよ」と子どもたちに教えるべきです。そこを子どもたちに教育していかないと、先生方のこれからのクラス運営はますます難しくなると思います。「みんな仲良く」という理念も確かに必要かもしれませんが、「気の合わない人と並存する」作法を教えることこそ、今の現実に即して新たに求められている教育だということです。

子どもたちに対するこうした教育の方向性は家庭でも必要なことだと思います。子どもが「○○ちゃんというムカつくやつがいる」と家でふと漏らしたときに、「その子にもいいところはあつてでしょう。相手のいいところを見てこつちから仲良くする努力をすれば、きっと仲良くなれるよ」というのは一見^(四)大人の意見ですよね。その理想どおりに運ぶ^(五)こともあるでしょうが、現実にはなかなか難しいかもしれません。こんなときは「もし気が合わないんだつたら、ちよつと距離を置いて、ぶつからないようにしなさい」と言つたほうがいいのかもあつてと思います。

これは「冷たい」ではありません。無理に関わるからこそ、お互い傷つけ合うのです。ニーチェという哲学者の言葉で「愛せない場合は通り過ぎよ」という^(B)警句があります。あえて近づいてこじれ

るリスクを避けるという発想も必要だということです。

ニーチェは、「ニヒリズム」という言葉で有名な哲学者ですが、もうひとつ「ルサンチマン」というキーワードに焦点を当てて、ものを考えた人です。ルサンチマンとは、「恨み、反感、嫉妬」といった、いわば人間誰もが抱きうる「負の感情」のことです。

誰でも、自分がうまくいかなかったり、世の中であまり受け入れられなかったりしたときに、自分の力が足りないんだと反省するよりも、往々にして「こんな世の間違っているんだ」と考えたり、うまくいっている人たちを(五)妬んだりするものです。そんな感情を自覚して、「どうやりすぎすか」を考えることが大切です。ニーチェは、「ルサンチマンについて陥ってしまうのが人間の常なんだけれども、そこからどう脱却できるか」ということを(六)シサしている哲学者です。「(C)やりすぎす」という発想が、非常に大事なことで私は思っています。

自分ができないことがやすやすとできる人、自分より容姿に恵まれていたり、人から愛されている人——そういう人を見ていると心がざわざわして落ち着かなくなる時がありませんか。

人が生きていくうえで、ルサンチマンに絡め取られそうになる場面はたくさんあります。人間の生にとつて必要な負の感情として、ルサンチマンには人間の本質的な何かがあるのです。ルサンチマンは誰にでも起こりうる感情です。しかし、ルサンチマンにとらわれすぎたり、とらわれ続けていたりすると、結局のところ、自分自身の「生」の可能性を閉ざしてしまうことにつながるのです。だからこそ、それにとらわれ続けられないことが大切なのです。

失恋しても気持ちの切り替えができず、いつまでも引きずっているとストーカーになってしまいます。好きな他者から自分の好意を否定されれば誰でも落ち込みますし、恨みに思うこともあるかもしれません。しかし、そこから何とかして抜け出していないと、その後の人生は夷りの少ないものになってしまいます。最近の傾向として優秀な生徒や、かわいくて目立つ子がじめのターゲットにされるケースが増えているというのも、そうした「(D)卓越した何か」を目の当たりにしたときに、自分の中にそうした卓越性を感じられない多くの他の子どもたちのルサンチマンが、原因の根っこにあることが多いようです。

自分がそんなルサンチマンの感情に(七)囚われがちなときは「自分は自分、人は人だ」という、ちょっと突き放したようなものを見方をしたほうがいいと思います。「私とは関係ないでしょ」ということです。

「関係しよう、関係しよう」とするから、話がこんがらがってくるのです。

「クラスはひとつ、みんないっしょだ」というような幻想が強すぎると、人と少し違う子がルサンチマンのターゲットになってしまうことがあるのです。体育祭や文化祭など、学校行事の中で何か目的があるときに、期間限定で団結して一生懸命になれることは、とてもいいと思います。でも、日ごろはやはり「あまり濃密な関係を学校空間の中で求めすぎない」ということが、教師や大人の心得として、じつは大事なのではないかと思っています。

問一、傍線部(あ)～(お)のカタカナを漢字に直しなさい。

【記述式解答】

- (あ) キオク (い) ショウチョウ (う) ハツキ (え) トウメイ
(お) シサ

問二、傍線部(ア)～(オ)の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

【記述式解答】

- (ア) 掲(げる) (イ) 無垢 (ウ) 普請 (エ) 妬(んだり)
(オ) 囚(われ)

問三、傍線部(A)「そろそろ、そうした発想から解放されなければならない」とあるが、筆者がこのように言うのはどうしてだと考えられるか。もっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号1】

- 1、子どもはみんな仲良くという発想のクラス運営は、地域に濃密な関係があった昔なら可能だが、それが失われた現在では困難で、子どもたちを追い詰める危険性があるから。
- 2、小学校がムラにひとつだった昔でさえ、じっさいはクラス全員が仲良くなるのは難しかったと考えられ、子どもはみんな仲良くという発想には現実的な根拠がないから。
- 3、筆者はちよつとひねくれた人間であり、こどもは基本的には仲良くなれないものだと考えていて、そうした発想では逆に子どもたちを追い詰めることになるから。
- 4、筆者は仕事柄、小中学校の校長先生や先生方と話をする機会があるが、クラスのみんな仲良くなることより、まずはいじめゼロを目指すことが大切であるから。

問四、空欄□に入る表現としてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号2】

- 1、のみ
- 2、に限って
- 3、くらい
- 4、ですら

問五、空欄□に入ることばとしてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号3】

- 1、アフォリズム
- 2、スローガン
- 3、アイロニー
- 4、プロフェッショナル

問六、空欄□に入ることばとしてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号4】

- 1、強制的
- 2、意識的
- 3、相反的
- 4、偶発的

問七、空欄 ニ に入ることばとしてもつとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号5】

- 1、懐の広い
- 2、情にもろい
- 3、腹が決まった
- 4、腰が低い

問八、傍線部 (B) 「警句」の意味としてもつとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号6】

- 1、人の世の道理をそれとなくほのめかす短い言葉
- 2、危険のありかをわかりやすく指し示す言葉
- 3、好ましくないことをしないように前もって他人を戒める言葉
- 4、短く巧みな表現ですごく真理を述べた言葉

問九、傍線部 (C) 「やりすごす」とあるが、「やりすごす」ためには何が必要だと筆者は言っているか。もつとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号7】

- 1、昔のようにムラの共同生活を核にした地域の支えがあること。
- 2、気の合う友だちに出会えたりするのはとてもラッキーなことと思うこと。
- 3、自分は自分、人は人という突き放したようなものの見方すること。
- 4、相手の悪いところだけでなく良いところも見えて仲良くする努力をすること。

問十、傍線部 (D) 「卓越」の意味としてもつとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号8】

- 1、他の人間にはない特徴を備えていること。
- 2、他より抜きん出て優れていること。
- 3、周囲の人間とは異質であること。
- 4、天分に恵まれていること。

問十一、本文の内容と合致するものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号9】

- 1、ルサンチマンは、人間にとって必要な感情ではあるが、それにとらわれてしまうとニヒリズムに陥ってしまう。
- 2、学校でのいじめをなくしていくためには、みんなの心が通い合うようなクラスを作っていく必要がある。
- 3、子どももまた恨みや嫉妬などの負の感情をいただくが、学校教育の場ではそのことが忘れられがちである。
- 4、かつての村では多くの共同作業に子どもも加わっていて、そこでの結びつきを通じて地域が学校を支えていた。

二、次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

少なくとも、テレビは自由に見てよい領域のように見える。へ a へ、視聴すること自体、また私たちの反応のほとんどが知らず知らず消費者と生産者の力関係に変化を与えているという事実からしても、私たちはテレビと深く関わることになる。読書をするとき、私たちは本をスキャンしているが、その行為はあくまでも自分がコントロールしている。へ b へ、テレビを見ているとき、私たちを「読んで」いるのはテレビのスクリーンのほうなのだ。私たちの網膜は電子ビームの直接の標的になっている。テレビのスクリーニングと私たちの視線が出会ったら、へ c へマシンと人間が視線を交わしたら、マシンの方が強力だ。テレビ装置を前にすると、私たちの防衛能力は落ちるのだ。私たち人間は、複数の感覚を巻き込んだ誘惑に弱く、影響を受けやすい。してみると、「視聴率の高いプライム・タイム」の本当の意味は、へ d へ「発火^{プライム}をしかける時間」、すなわちテレビ視聴者の心に火をつけるのにもってこいの時間帯ということになる。

(デリック・ドウ・ケルコフ『ポストメディア論―結合知に向けて』NTT出版 より)

空欄へ a へ c へ d へに入ることばとしてもつとも適当なものを、次の1～4からそれぞれ選びなさい。

- へ a へ 1、もつとも 2、やはり 3、すなわち 4、つまり 【解答番号10】
へ b へ 1、なぜなら 2、あるいは 3、しかし 4、また 【解答番号11】
へ c へ 1、ただし 2、すなわち 3、ゆえに 4、むしろ 【解答番号12】
へ d へ 1、ゆえに 2、ともあれ 3、他方 4、まさに 【解答番号13】

三、次の空欄へ「」に入る漢字としてもつとも適当なものを、1～4からそれぞれ選びなさい。

【解答番号14～18】

- 14 深く仏道に帰「」する。 1、参 2、恵 3、依 4、還
15 勝つて兜の緒を「」めよ。 1、絞 2、占 3、閉 4、締
16 肝に「」じて忘れないようにする。 1、名 2、命 3、瞑 4、銘
17 優秀な弁護士だといっても二年目の若手では「」が知れている。 1、高 2、鷹 3、多寡 4、貴
18 濡れ手に「」のマネーゲームがあるはずがない。 1、阿波 2、沫 3、泡 4、粟

四、次の空欄「 」に入ることばとしてもっとも適当なものを、1～4からそれぞれ選びなさい。

【解答番号 19～21】

19 二の舞を「 」

1、踊る

2、演じる

3、踏む

4、見る

20 揚げ足を「 」

1、踏む

2、掻く

3、折る

4、取る

21 煮え湯を「 」

1、飲ます

2、浴びす

3、かける

4、冷ます

五、次の22・23のことばの使い方としてもっとも適当なものを、1～4からそれぞれ選びなさい。

【解答番号 22・23】

22 ニツチ

1、彼女は神経質な性格だが、表面上はニツチを装っている。

2、楽しかったところが思い出されて、急にニツチな気分になった。

3、これまで誰も気づかなかったような、ニツチな市場に参入する。

4、いくつもの計画を成功させた後は、今では誰もが認めるニツチだ。

23 駆逐

1、長雨で作物はすっかり駆逐された。

2、扇風機で風を向こうへ駆逐する。

3、ゴミを処理機の中へ駆逐する。

4、良貨は悪貨を駆逐する。